

ふつうって何だろう？

葛飾小学校 三年 山田 真央

書名「ふみきりペンギン」

著者「おくはらゆめ」

「ゆうとつて、左手でえんぴつ持つてるのヘンじやない？」

私はこの言葉を読んで、「右手がふつうってこと？そもそもふつうって何だろう。」と思いました。私は、えんぴつを持つのもおはしを持つのもボールを投げるのも全て右手です。だから私は、ふつうだということなのでしょう。

この本に出てくるゆうとは、左利きです。左利きのことを「ヘン」と言われることを、「ふつうとちがうだけで、からかってくる友だちがふえた。」という理由で学校がつまらないと感じてしまいます。でも、ペンギンやかい犬のマルは「みんなとちがって、なんかかっこいい」や「左ききでも右ききでもどっちでもいい」と言ってくれました。

私は、自分にとっての「ふつう」はあるけれど、

みんなが同じ思いで使う「ふつう」はないと思います。たとえば、私の家では夕飯を食べた後にお風呂に入りますが、お風呂に入った後に夕飯を食べる家もあります。また米を主食としている家があれば、パンを主食としている家もあります。このように、自分の中の「ふつう」は国によってもちがうし、その家に住む人によってもちがうものです。その中で自然に「ふつう」というきじゆんをもちます。でもこの「ふつう」はみんなに通じるわけではないので考えをおしつけてはいけません。

ゆうとの「左利き」は、そのクラスの中や学校の中、世の中全体で、右利きの方が多いことを考えると少ない方に入ってしまうです。でも「少数派」なだけで「ふつうではない」わけではないのだと思います。

この「ふつう」という言葉は、ゆうとをきずつけてしまったようにだれかをきずつけてしまうきけんのある言葉です。自分の体に不自由なところがあつたり、学習が苦手だつたりする人もいますがそれ

を「ふつうではない」と考えてしまった場合はその人をひいていしていることになるからです。私の弟は成長がゆっくりなので、同じ四才の子の中ではお話上手にできない「少数派」です。でも「まおちやんの弟はふつうじゃないね。」と言われるときずつきます。ふだんは何も気にしていないけれど、三さいじけんしんなど他とくらべなければいけないときにお母さんも

「ふつうって何だろうね。お母さんにとって、ふつうの子だけだね。」

と言ってます。

このように「ふつう」はむずかしい言葉だからこそ、いつでもどこでも使うのではなく相手のことをよく考えて使っていくことが大切だと思います。

「ふつう」という言葉で自分がだれかをきずつけることがないように、そして「ふつう」でいたいと思いきすぎないように一人一人が気をつけていけば「ふつう」でなやむ人もいなくなるのではないでしょうか。一人一人がちがっているからこそかがやける、

そんな世の中を生きていきたいです。（原文ママ）